

青森市東岳における鉱山史（追補）

島口 天¹⁾

A Mining History of Azumadake in Aomori City, Northeast Japan (Supplement)

Takashi SHIMAGUCHI

Key words : 東嶽鉱山, 鉄鉱床, 明治～大正期, 青森市, 東岳

1 はじめに

青森市東部に位置する東岳（標高 684.0m）には、石灰岩、チャートおよび泥岩を主とした先古第三系が分布し、これらは花崗閃緑岩および花崗閃緑斑岩により貫入され、部分的に接触変成作用を受けている。石灰岩中には、マグマから分離した熱水やマグマによって熱せられた地下水が、石灰岩と大規模に反応して生成された接触交代鉄床（銅・鉄鉱床）があり、大正～昭和期前半にはいくつかの鉱山が稼行していた。

筆者は以前、東岳の鉱山史について、東岳の地下資源開発を主目的とした調査・研究報告および論文を調査し、関連した記載を整理して報告した（島口, 2011）。さらに、秋田県の小坂鉱山を経営していた合名会社藤田組が石灰岩を採掘していた鉱山に関しては、大正期の東奥日報の記事を収集して報告した（島口, 2014）ほか、石灰岩採掘現場跡に現在も残っている施設・設備の調査結果、周辺住民からの聞き取り調査結果について報告した（島口, 2015）。

今回は、島口（2011）以降に、鉱山史や鉱業施設について明治・大正期の東奥日報の記事を調べる過程で得られた東岳の鉱山に関する記事を示し、島口（2011）の内容について補足するほか、関連事項を修正して報告する。

2 東奥日報掲載記事

記事はできるだけ原文のまま掲載したが、旧漢字は新漢字に、難読漢字は平仮名に直し、句読点を入れて文章を区切ったほか、文書表現を意味が変わらない程度に現代の表現に直した。

■明治 36 年（1903 年）

9 月 13 日 東嶽鉱山と大場運送店

東郡東嶽村における鉄鉱山のことは、しばしば本紙の報道せる所なりしが、三井鉱山会社が同鉱山を手に入れることとなりし次第及び今後の計画等につき聞く所ありたれば、左に記すべし。

△三井鉱山と大場運送店

当地安方町運送店大場富太郎氏は、去る明治 20 年以来 11 年間三井鉱山に勤務せるよしにて、同会社における信用厚く随て三井物産会社青森取組店設置の承諾を得、始

めて明治 32 年 4 月より同取組店兼ね運送店を開業せるなりと。

△鉄山発見と売却

然るに大場氏は数年前、東郡東嶽村に鉱山 2 鉱区を発見し居たるか、過般当市榊野傳右衛門、同白戸豊吉、宮田村木村清松、同渡辺嘉四吉 4 氏の許可を得たる同村の鉱山を 3,000 円に譲り受くることとなり、榊野氏は 5 分の権利故 1,300 円は同氏に、残額 1,700 円は他の 3 氏に支払いをたしたるゆえにて、同氏所有の鉱山と今回譲り受けのものを合わせ総へて 136 万 8 千余坪となるよし。

△三井鉱山に譲与

大場氏の所有鉱山については、始め宮城県にある釜石鉱山主田中庄衛門氏はすこぶる有望なるを聞き、特に同製鉄所長横山久太郎氏を派出し取調べられたるも、種々拡張の場合、手回り兼ねる故をもって三井鉱山に相談をなしたるものなるよしにて、ために三井鉱山よりしばしば社員を派出し調査をなしたる結果、譲り受けの相談となりたるか、ついに去る 7 月に至り全部にて金 2 万円にて譲り渡すことに決定せるか、まず当座 4 千円を支払い他は採掘着手次第 5 ヶ年間に残額を支払うはずにて、事業着手の場合は同鉱山におけるすべての需用品は大場運送店より売り渡しの条件を付したり。

△鉄山分析とトン数

前項のごとく三井会社と大場氏との協定なりたるをもって、三井鉱山より直に技師理学博士長谷川鑑示氏及び社員大石哲雄氏を派出し、東嶽鉱山における緑鉄の測量をなし分析を行いたるに、普通の鉱山は五分五厘なれば好事業なれば、同鉱山は無類の良好にして七分五厘の好成績を顕しすこぶる有望にて、10 年にて 100 万トン以上の鉄を採掘するを得べしとは同博士の保証せる所なりしと。

△鉱山採掘準備

東嶽鉱山は意外の好望なるをもって、採掘準備のため支配人宮本平九郎・専務取締役塚馬両氏は、今秋来青同山の実況を視察するよし。

△採掘と製錬

三井鉱山会社にては東嶽より鉄石を採掘するも、同山は製錬所を設けざることにて、採掘したるものはすべて

1) 青森県立郷土館 学芸主幹（〒030 - 0802 青森市本町二丁目 8 - 14）

汽船または帆走船にて九州製鉄所に運び、同所において製錬の計画にて目下連絡の取り運び中なりと。

9月15日 東嶽鉦山（続）

△鉦石採掘

東嶽における鉄鉦山は、三井においてすこぶる有望のものとして認められたか、これか採掘についてはまず製錬所必要にして売場を見出さざるべからざるより、まず九州なる製鉄所において製錬する計画にて、製鉄の売場についても目下商談取運びに取り掛かりいとの趣きなれば、これか採掘も遠きにあらざるべし。

△採掘の便

該鉦山は東郡東嶽村字瀧澤の村端にして、現場までは野内停車場をへだてるおおよそ1里23町くらいの所にして、停車場付近まではあまり困難なる箇所もなく、道路を開墾するのはもっとも容易なる見込みにて、すこぶる便宜の場所なりと。

△軽便鉄道敷設

鉦山の採掘高は10年にて100万トンの見込みなれば、1年10万トンの鉦石を採掘し、これか運搬をなさざるべからざることなるか、到底これらの運搬は馬背等にては間に合わざることなれば、軽便鉄道を敷設するに至るべしと。

△着手の費用

三井鉦山会社にては該鉦山の採掘は初めより盛んに着手せざるべく、順次拡張の方針にて、これが採掘その他に要する費用は、おおよそ30万円余を要し、事務所等の事業は3ヶ年くらいにて整頓せらるべしと。

■大正6年（1917年）

10月20日 東嶽鉦山を見る（上）

▽山神祭の殷賑

一昨日、午前9時から東嶽鉦山の山神祭が執行された。この鉦山が経営されてから日がなお浅いので、その組織及び経営ぶりがあまねく徹底されていないが、この山は三井の製鉄部ともいべき北海道製鉄株式会社により、去る6月から採掘され始めた。この製鉄会社は本邦鉄材の需用がますます急を告げ、いわゆる自給自足の必要に迫られた本年2月1日をもって、北海道炭鉄汽船株式会社から分離して独立経営することとなり、三井家を中心とし、炭鉄汽船の株主が共同出資して300万円の株式会社としたのである。さて、北海炭鉄会社は鉄道が国有に帰した結果、資本位余裕を生じ、いずれの方面にか資本を融通運転せなければならなくなった当時の経営者たる井上角五郎氏が、

▽将来製鉄事業の有望なるに着眼し、これに資本を投じもって製鉄を炭鉄汽船の副事業として創立したのであった。しかして明治42年、室蘭輪西に溶鉦炉を設立し、主として倶知安虻田より採掘する鉦石を製錬し来つたが、朝鮮介山の鉄山、支那大冶大鉦山をその手に収めたにより、これらより採掘する鉦石を製錬するために施設を拡張する必要を感じ、さらに昨年8月起工し、本年6月に

至りて第二の溶鉦炉を竣工せしめたのである。この工事中、すなわち本年2月をもって序上のごとく工学博士山田直矢氏を社長として製鉄会社の創立を見るに至るとともに、いよいよ東嶽鉦山の採掘も決し、その手続きに出てたのである。

▽最初、東嶽鉦山は三井の所有に属しいれるが、中途にして山縣雄三郎氏に譲渡され、さらに橋本組の手に権利が譲り渡されたのであるが、前記溶鉦炉の関係上、採掘に着手せられなかった。しかるに製鉄会社現技師長江藤捨三氏がその当時精細に実地調査して有望なのを確かめていたのであるから、製鉄会社の創立するやいなや買収したのである。かくて融雪期を待つて社宅工夫長屋を建て、事務所倉庫を建設して一切の設備を整い、6月からいよいよ採掘に着手したのである。さて、輪西の2個の溶鉦炉はいずれも1個200万円内外を要したるものにて、江藤技師長はドイツを視察し、その式に従って建設せるものであって1日1個の溶鉦力100トン宛なるが、さらに目下第三期計画の中にし、もしこの計画を実現するにおいては1000万円に増資を要すべく、これに対する増資の計画はすでにたち、それぞれ進捗中なれば今年中には発表の運びに至るべしとのことだ。

▽東嶽鉦山の位置は、東嶽村大字瀧の澤字上瀧澤後方にあり、すなわち野内川鉄橋傍踏切より32町にして上瀧澤に達し、それより山手に12町登りて事務所構内に入るのであるが、ここは海拔900尺にして真正面に蟹田村を望み、やや左方に偏し、眼下に青森を眺めて指呼し得べく正西面に岩木山の秀嶺を望み、気清く水澄み眼界遠く開け一望千里の別天地である。しかして現今採掘しあるは海拔おおよそ1000尺にして、鉦石は60~90%の優秀なるものなりというが、それを運搬するには今のところソリをもって上瀧澤まで搬出し、それより荷馬車をもって青森駅まで輸送し、汽船に積んで室蘭製鉄所に輸送しつつあるが、目下工事中の

▽鉄索は8分通り進捗し、昨今盛んに発動機の据付中にてこれも今月中に完成の予定であるから、来月初めより鉄索運搬が開始さるるに至るだろう。建築物は事務所1個、倉庫3個、火薬庫2棟、社宅1棟4戸、坑夫長屋4棟64戸にして、今1棟は建設中である。日々の採掘量は70~100トンの間にあるよしなるが、運搬設備完成の暁はまたまた盛況を呈する事であろうということだ。山神社は構内南面の高所に建設され、10時半より式典が開始されたが、祝詞礼拝が終わってから余興黒石座の狂言を見て祝宴会となった。渡辺綱雄氏の挨拶、瀧澤区長代理鈴木常作氏の謝辞あつて献酬に移り、交歓時余にして散会した。この間橋本音楽隊の奏樂、黒石座一行の余興、花火等が絶え間なく興を添えたので、近郷近在より参集する者数知れず、緑門万国旗提灯等に裝飾至らざるなく実に同地方開闢以来未曾有の殷賑を極めた。（以降、来賓紹介は省略）

10月21日 東嶽鉦山を見る（下）

▽今に学校も建つ

▽木ソリ運搬は木曾山林の木馬運搬から案出したものらしく、採掘された鉱石を1呎16貫宛に詰め込み、それを木ソリに積んで麓なる上瀧澤まで搬出するのであるが、これには主として大字瀧澤の住民が従事している。1日17・8人から24・5人までのところであって、1俵4銭6厘で1日に8俵は積める。で順序よくやれる日は1日5回程も往復はできるようだから、1日の賃金は1円84銭となる。しかし毎日毎日これほどの金になるのはあまりに虫がよすぎるので、たいていは1日1円2・30銭程度だという。そして麓倉庫のある瀧澤から青森までは荷馬車に積んで運搬するが、この馬車も多くは地元の住民で40台から60台宛動くという

▽坑夫の種類は採鉱、採鉱除工夫、坑夫、俵装夫、中出、雑夫等に分かれているが、このたび新しく鉄索夫が増設された。そのうち採鉱、採鉱坑夫が玄人でなければならぬが、その他は素人でも練習すれば容易にできる仕事である。それで4棟64戸に住んでいる者がこの玄人の部に属し、主として秋田県院内地方から来ている。これは坑夫の請負者が院内町であるからだという。この玄人のほかに俵装、中出、雑夫、木ソリ人夫が加わるから、日々の頭数は200余となり、それに荷馬車運搬者を合すれば250名～300名近くの間人が動くこととなるという。鉄索が完成すれば木ソリ人夫が不要となり、従って1日7・80円宛会社の利益になるか、それがため木ソリ人夫は失業するかというにそうではない。会社ではより以上進んだ仕事に使役するといっている。

△鉄索の発動機は8馬力の石油発動機であって、昼夜兼業で組み立てを急いでいるというが、見たところ8・9歩通り竣工しているから、発動さえ据え付ければ機械が運転しそうになっている。この東嶽鉱山に連続して数カ所の鉱山があるが、いずれも銅鉱であって未だ採掘に着手していない。中には一度採掘したのもあるが、費用のみがかさんで算盤がとれず（採算が）結局停止したのもあるという。そのうち最も有望なのは田通信大臣の持っているのとか関係しているのとかであるという。しかしこれらは何れも東嶽の背面か余程奥深くにあるので、運搬その他に非常に不便であるらしい。上瀧澤から野内の踏切までの道路は、毎日毎日数十台の荷馬車が重い鉱石を積んで通行するため

▽道路は破壊されて一朝降雨でもあると泥土車両を没する体裁であって、山神祭の日も前日の雨のためわだちが深く刻まれ、乗合馬車は馬屋敷までより行けず、その向こうは荷馬車に積み込まれめまいがするほど振りつけられた。しかしこの道路が緊要欠くべからざる鉄鉱を出したのだと思えば不足もいわれぬ。村民もまた何一つ不平らしい顔をせぬが、しかしいつまでもこの道路を使用することは会社にとっては採掘と運搬力の関係上すこぶる不利益なので、軌道を敷いてトロ運搬の計画を立て、目下調査中だということだ。事務所は他の鉱山に比して何

れかといえれば便利な場所にあるけれど酒屋へ一里という山間であるため普通の日用品飲食物は会社の方でそれぞれ供給するようたくさん購入しておく由だが

▽鮮魚や野菜に至っては常に欠乏を免れぬ。野菜を買うにも鮮魚を買うにもみな青森を頼りとせねばならぬから、もし魚屋でも行こうものなら坑夫長屋の入口で引っ張りだことなってしまうため、上手の官舎などではのどを鳴らして待っていても御利益がないという。また当市の澤田医師が嘱託医となってるけれど、急病人や負傷者でも出た時は困るので、村とも協議して相当な医師を招へいする方針だという。一番不便なのは子弟の教育であって、あの山奥から里余の宮田小学校まで通わせることはできぬから、ぜひ山の内に学校を建設したく適当な夫婦揃えの教員を物色中だという。もちろん俸給も相当に出すし、住宅等も十分注意して建ててやるはずだという。

3 補足・修正

① 鉱山名

前項に記載した新聞記事は「東嶽鉱山」についてのものだが、記載されている鉱山の位置や鉱石の採掘を始めた年、北海道製鉄株式会社との関連から判断すると、この鉱山は島口（2011）で記載した「東嶽鉄山」であることがわかる。島口（2011）にも「東岳鉱山」を記載しているが、この鉱山は東岳北部地区にあった別の鉱山である。それぞれの鉱山の位置を図1に示す。

「東嶽鉄山」と記しているのは渡辺（1944）だが、これは鉄鉱床を稼行対象とした鉱山であることを強調した呼び方で、本当は記事にあるように「東嶽鉱山」でよいと思われる。この「東嶽鉱山」と北部地区の「東岳鉱山」は、稼行していた時期が異なるため、同じ鉱山名でも問題がなかったと考えられる。

② 東嶽鉱山の鉱山史

新聞記事を元に、東嶽鉱山の鉱山史をまとめた。主要項目を■に示し、それを補足する内容をその下に記した。さらに、島口（2011）の表1に補足・修正を加えた新たな表1を示す。

■ 明治36年（1903）7月、青森市安方町で運送業を営む大場富太郎が、東郡東嶽村に所有する136万8千余坪の鉄山鉱区を三井鉱山株式会社に売却した。

（補足）

この鉱区は、大場が数年前に発見した2鉱区に、東嶽村の梶野・白戸および宮田村の木村・渡辺の4氏が所有する鉱山を買収し合わせたものであった。

売却に至った経緯は、この鉱山が大変有望であると聞いた宮城県の釜石鉱山主・田中庄衛門が、同製鉄所長を派遣して調べたところ、種々拡張を行った場合にうまくいかないと思われたため三井鉱山に相談したことが発端である。これを受けた三井鉱山で社員を派遣して調査した結果、10年間で100万トンの鉄が得られる見込みがあり、譲り受けることになった。

大場は明治 20 年から 11 年間、三井鉱山に勤務していた経験がある。このことで三井鉱山株式会社からの信頼が厚かったこともあり、明治 32 年 4 月から三井物産会社青森組店兼運送店を開業している。鉱区を売却する際の条件として、東嶽鉱山の事業が開始された際には、需用品をすべて同店から購入するという条件をつけている。

■ 三井鉱山株式会社の所有となった東嶽鉱山は、その後山縣雄三郎に譲渡され、さらに橋本組に譲渡されたが、採掘に着手されることはなかった。

■ 大正 6 年（1917）、北海道製鉄株式会社が東嶽鉱山を買収した。買収は、おそらく同社が創立した 2 月と思われる。雪解けを待って社宅・工夫長屋を建て、事務所・倉庫を建設してすべての設備を整え、6 月から採掘に着手した。

（補足）

北海道製鉄株式会社は、同年 2 月 1 日に北海道炭鉱汽船株式会社から分離して独立経営することになり、三井家を中心とした炭鉱汽船の株主が共同出資して株式会社となった。同社の技師が当時、精細に実地調査して東嶽鉱山が有望なことを確かめていたため、同社が創立するとすぐに東嶽鉱山を買収した。

北海道製鉄株式会社は、北海道炭鉱汽船株式会社の副事業として明治 42 年に室蘭輪西に溶鉱炉を設立して創

立した同社の製鉄部である。当初は倶知安虻田より採掘する鉱石を製錬していたが、朝鮮介山の鉄山、中国の大冶鉱山を手に入れたことから大正 5 年 8 月に第二溶鉱炉の建設をはじめ、その工事中の同 6 年 2 月に北海道製鉄株式会社が設立された。第二溶鉱炉は 6 月に竣工した。

■ 同年 10 月 18 日の午前 9 時から山神祭が行われた。（補足）

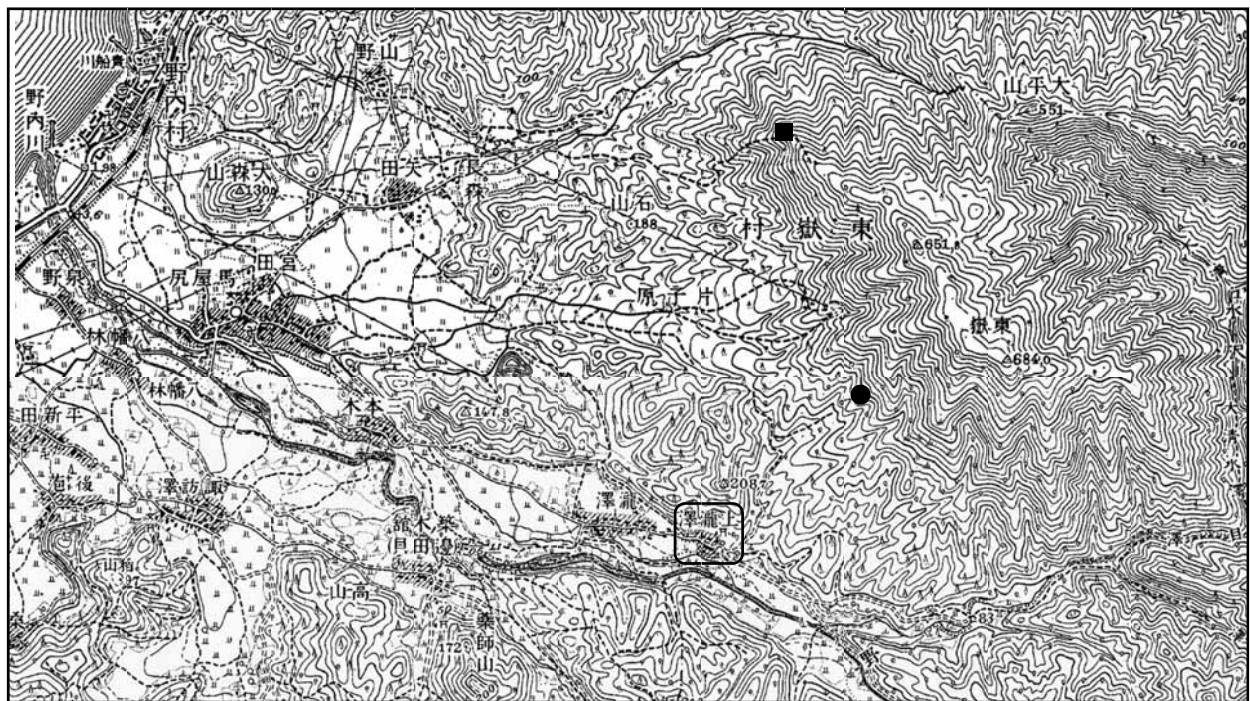
鉱山には事務所 1 棟、倉庫 3 棟、火薬庫 2 棟、社宅 1 棟 4 戸、坑夫長屋 4 棟 64 戸があり、1 棟は建設中。探鉱工夫は秋田県院内（現在の湯沢市西部地区）から来ており、坑夫長屋に住んでいた。

採掘した鉱石は 1 袋に 60kg 詰めて木ソリに積み、上瀧澤まで下ろした。上瀧澤からは荷馬車で青森駅まで運び、汽船に積んで室蘭に輸送した。木ソリに換わる鉄索の準備が進められているほか、馬車に換わる軌道の計画もある。

4 その他関連事項の訂正

北部地区の東岳鉱山について再度、渡辺（1944）、丸山・服部（1959）、南部ほか（1962）の記載を検討した。

島口（2011）では、野内鉱山と東岳鉱山は場所が異なる等の理由から別の鉱山と考えたが、検討の結果、どちらも孔雀坑から採掘を行っていることや大日本鉱業株式



1km

図 1 上瀧澤と東嶽鉱山の位置

（大日本帝國陸地測量部から発行された 1/50,000 地形図「青森東部」[大正 4 年発行（大正元年測図）]・「浅虫」[昭和 16 年発行（昭和 14 年修正測図）]のそれぞれ一部を使用）

※ 東嶽鉱山の位置は、新聞記事の「上瀧澤から山手に 12 町（約 1,310m）登り、海拔 900 尺（約 270m）に事務所、採掘場は海拔 1,000 尺（約 300m）」ということから●印の場所と考えられる。ここは、のちの東栄鉱山の上ノ沢床床（鉄）に当たる。上瀧澤は四角で囲んだ場所。上瀧澤から東嶽鉱山まで破線の道が記されている。

※ ■印は、北部地区に昭和 18 年以降にあった東岳鉱山の位置。

表 1 東岳における鉱山の稼行状況

年 号	同和鉱業野内採石所 (中部地区)	野内鉱山→東岳鉱山 (北部地区)	東嶽鉱山→東栄鉱山→月光鉱山 (南部地区)
明治 30 年 1897 年 明治 36 年 1903 年 			磁鉄鉱の転石発見 7 月、大場富太郎が所有する鉄山鉱区を三井鉱山(株)に売却 三井鉱山(株)が所有する東嶽鉱山は
大正 3 年 1914 年 4 年 1915 年 5 年 1916 年 6 年 1917 年 7 年 1918 年 8 年 1919 年 	合名会社藤田組が開発 石灰石の採掘開始 7 月、野内駅まで索道運用開始		山縣雄三郎を経て橋本組に譲渡されたが、採掘されることはなかった 2 月、北海道製鉄(株)が東嶽鉱山を買収し、6 月から採石開始 30 ヶ月間に上ノ沢鉱床と大滝鉱床の一部から鉄鉱石約 30,000t を出鉱
昭和元年 1926 年 11 年 1936 年 12 年 1937 年 13 年 1938 年 14 年 1939 年 15 年 1940 年 16 年 1941 年 17 年 1942 年 18 年 1943 年 19 年 1944 年 20 年 1945 年 21 年 1946 年 22 年 1947 年 23 年 1948 年 24 年 1949 年 25 年 1950 年 26 年 1951 年 27 年 1952 年 28 年 1953 年 29 年 1954 年 30 年 1955 年 31 年 1956 年 32 年 1957 年 33 年 1958 年 34 年 1959 年 35 年 1960 年	<p>↑</p> <p>(株)藤田組に社名変更</p> <p>年間の採石量 38,000t ~ 40,000t</p> <p>↓</p> <p>同和鉱業(株)に社名変更</p> <p>休山</p>	<p>大日本鉱業(株)が野内鉱山の孔雀坑を試採</p> <p>大日本鉱業(株)が東岳鉱山の鉱区を設定し、本格的に探鉱開始</p> <p>工藤等が小規模に採掘を始め、2 年間に銅鉱石を 8t、鉄鉱石を約 400t 採掘 休山</p>	<p>高谷が試掘権を得て番屋鉱床付近の探鉱実施</p> <p>鉱業権が開規方に移り、東栄鉱山として開発が進められた</p> <p>昭和 20 年までに銅鉱石約 6,000t を出鉱した</p> <p>昭和 12~13 年に青森石灰工業(株)が石灰石を 1,000t、昭和 14 年には開規方によっても石灰石が採石され昭和 15・16 年には 12,000t 採石された</p> <p>東栄鉱山休山</p> <p>↓</p> <p>探鉱は小規模に継続</p> <p>大滝鉱床で鉄鉱体確認</p> <p>月光鉱山が鉱区を継承し鉄鉱石の採掘を開始</p> <p>月光鉱山休山</p> <p>日鉄鉱業(株)が加入して探鉱を継続</p>

※ 縦点線は試掘や探鉱の時期を示し、縦実線は鉱山の稼行時期を示す。

会社と関連があることから、何らかの理由で途中から鉱山名を変更した同じ鉱山であると考えられた。よって、鉱区が設定された昭和 18 年以降を東岳鉱山, それ以前を野内鉱山と訂正し, 表 1 に示す。

引用文献

- 丸山修司・服部富雄 (1959) 東岳地区. 未利用鉄資源 第 7 輯, 通商産業省 地下資源開発審議会鉱山部会, p.62 - 68.
- 南部松夫・谷田勝俊・鹿野新平 (1962) 東嶽の石灰石鉱床. 青森市のマンガン・ドロマイトおよび石灰石調査報告書, 青森市総務部企画課, p.18 - 27.
- 島口 天 (2011) 青森市東岳における鉱山史. 青森県立郷土館研究紀要, 35, p.9 - 14.
- 島口 天 (2014) 大正時代の藤田組青森電錬所と東岳石灰岩鉱山. 青森県立郷土館研究紀要, 38, p.27 - 36.
- 島口 天 (2015) 青森市東岳の石灰鉱山遺構. 青森県立郷土館研究紀要, 39, p.13 - 20.
- 渡辺萬次郎 (1944) 青森県東栄, 大日本野内両銅山産瀝青銅鉱と粘土状銅鉱. 岩石鉱物鉱床学会誌, 31, p.195 - 209.